

文人達と玖珠

『玖珠町史』の編纂に合わせて

甲斐素純

はじめに

『玖珠郡教育文化史』（昭和五十四年八月刊）では、「咸宜園と玖珠」と題し広瀬淡窓創立の咸宜園について触れられているが、玖珠におけるその他の文人達との文化交流・影響については、何ら記されていないのが現状である。

ゆえにここでは、脇蘭室とその高弟帆足万里、あるいは万里の高弟毛利空桑及び淡窓の高弟恒遠頼母（醸窓）と玖珠との関わり合いについて、若干記してみたい。

なお郷土玖珠の庶民文化については、拙稿①を合わせて参照願えれば幸甚である。

一、脇蘭室（一七六四―一八一四）

速見郡小浦（現日出町大字豊岡）の庄屋一族脇家に生まれる。国東郡富永村（現安岐町大字富清）の三浦梅園や大阪懐徳堂の中井竹山などに学び、小浦や鶴崎で私塾を開き子弟を教授した。

小浦では帆足万里以下日出藩の諸生が多く入門し、鶴崎（「知来館」）に移ってからは岡藩の角田才次郎（九華）藩校由学館（教授）や毛利熊八（空桑）などが入門している。

寛政十二年（一八〇〇）から文化十二年（一八一五）までの十四年間の「入学生徒名簿」（『蘭室全集』所収）によると、肥後藩士子弟は無論近隣諸藩領からも入門者がある。森藩については、享和三年（一八〇三）一月二十五日に森家中の佐藤逸次（頭成）が入門し、その他頭成の佐藤武右衛門・一宮弥四郎等も入門している。

明治・大正期の新聞記者で漢学者としても名高い西村天因（時彦）の著した『学界の偉人』所収の「脇愚山」によると、「豊後の鶴崎に二名山あり、一を秋山玉山と曰ひ、一を脇愚山と曰ふ。玉山は（中略）時習館の学政を創定して雄藩の文政を興せり」とい、
 「愚山二十一、肥後に遊学して藪孤山の門に入り。当時九州の文学は肥後を盛なりと為す。是より先き、上は銀台公（肥後藩主・細川重賢）の賢明あり、（中略）最も力を文学に用ひ、秋山玉山も摺んでて、委するに学政を以し、而して之を副たりしは藪孤山なり。」とある。

なおこの秋山玉山であるが、旧森藩重臣秋山家子孫泰士氏宅には、玉山の掛軸が一幅ある。同家との関係は秋山氏所蔵の「秋山系譜」によると、森藩に仕えた秋山七右衛門の二男（七左衛門弟）万五郎某の流れを組み、彼は細川家に仕え鶴崎に住み「遊庵」と号した。その万五郎の子「壽庵」の娘が、鶴崎の中山又吉の妻になっている。玉山はこの中山家の出である。



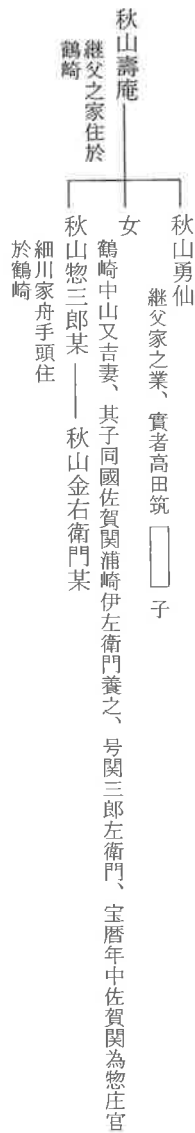
～ 秋山玉山の書 ～
 （玖珠町教育委員会提供。
 以下同じ）

秋山家所蔵の「秋山文右衛門(七左衛門の子)覚書」②によると、

- 一、七左衛門弟万五郎と申、鶴崎にて秋山遊庵と申、越中守様御茶屋守り仕候、子供大分有之由、
- 一、七左衛門妻之弟須藤五左衛門・須藤次郎左衛門と申候て、細川越中守様へ居申候、五左衛門ハ五百石被下候、次郎左衛門ハ式百石被下、小国之御代官暫仕居申候、

とある。

秋山遊庵(友安)の系統は詳しく記していないが、兄の妻の弟二人が細川藩の家臣であり、このような関係を通じて鶴崎と縁を結んだものであろうか。秋山家所蔵の「秋山系譜」には、



とある。

明治初期に武藤敵男が編著した『肥後先哲偉蹟』③の「秋山需庵」の項には、秋山玉山が撰した「顯考秋山府君墓誌銘」が記されている。それには、「先府君、諱見深、號需庵先生、豊後鶴崎人、姓中山氏、其先以工起家、考諱重勝、爲肥工正、以清白称、娶同邑秋山氏、生四男二女、府君其仲也、(中略)肥故医員秋山友安先生者、府君外祖父行也、其子玄忠先生病卒無嗣、逐以府君爲嗣、故冒秋山氏、(中略)府君娶夫人水足氏、生男四女三、皆早夭、養其兄子儀(玉山)爲子、(中略)府君生于寛文二年壬寅十二月之朔、享保十六年辛亥六月十有七日、病卒于家、年七十矣、……」とある。

玉山の養父需庵は熊本藩鶴崎詰の医師であるが、元は中山姓で父は重勝という肥工正(鶴崎詰御作事方棟梁)であった。重勝

と秋山氏との間には四男二女があり、需庵はその第二子である。

前書によると、

一、秋山友安儀、久留島浪人にて、鶴崎に居住、妙應院様御代、拾人扶持拝領、鶴崎御醫師に被召出、友安嫡子玄忠、若年病死、實子無之、鶴崎定話中山助左衛門次男需庵を養子仕、家業相續、享保十四年正月、需庵へ三人扶持御切米十石拝領、鶴崎定話醫師被召出、享保十六年六月十七日、病死、右需庵實方之姪、儀右衛門を養子に仕、家業相續、醫學稽古仕居、享保八年束髪被仰付、御次新組被召加、儒學稽古被仰付、

とある。中山助左衛門の嫡子は又吉で、儀右衛門(玉山)は又吉(定勝)の子である。

前書の「秋山玉山」の項によると、

名は、定政、一名は儀、字は子羽、儀右衛門と称し、玉山又青柯と號す、豊後鶴崎の人なり、本氏中山、叔父秋山需庵の養子となり、禄百石、時習館の建設に力を尽し、其教授職たり、宝曆十三年十二月十一日歿す、年六十二、立田山の南、小峰に葬る、

とある。

時習館教授の藪孤山が撰した「府学祭酒玉山先生墓誌銘」によると、玉山の母(篠田氏)は富士山に登った夢をみて、玉山を妊娠したという。西村天因が記すように、彼はのちにまさに文学の名山となったのである。

また天因は、「愚山の交友としては」ということで高本紫溟以下諸賢を挙げているが、その中に「玖珠の加藤子騰しやうなど唱和せり」とある。このことから『脇蘭室全集』を詳しくみていくと、『蘭室集略』(脇長之子善著・妹婿島永胤祚輯・門人帆足萬里鵬卿校)には、「復二加藤子騰一」という長文があり、その他「與二藤子騰一・贈二藤子騰一・重陽前一日得森藩加藤子騰書及詩次韻」といったような文が収録されている。この「子騰」とは、古文辞学派の儒学者で藩の大目付などを勤めた「加藤茂実しげみ」(一七六二〜一八一〇)のことで、その実弟が「加藤茂廉」つまり林家を十八歳で嗣いだ「林梅翁」(通称定五郎、字は

子考。号は臥牛。天保九年正月二十六日、七十一歳で歿す。である。

加藤家は、もと別府鶴見権現社の代々の祠官であった二十世福太夫兼幸の二男兼茂が森藩加藤家の祖で、初めて久留島通春に仕え御中小姓となった。茂実は六代茂周の子で、「初五郎・左源次・黙蔵・珠山・升山」ともい、江戸の服部南郭（通称小右衛門・名は元喬、字は子遷）に学び、藩主通嘉の手跡の師でもあった。

郷土珍珠の出身である大塚富吉氏の調査によると、「藩主通祐・通同・通嘉三代に仕え、騎士トナリ、禄七十石ヲ食ンダ、学ハ藩内ノ冠トシテ詩文ヲヨクシタ。（中略）文化七年十月朔日、年四十九デ歿シタ。高崎士濟正美トハ深交、脇蘭室トモ交リ



～ 林 梅翁の墓 ～

アリ」④とある。茂実には「升山稿」という詩稿がありその稿は、「翁が藩候世子の伝となって寛政六年末江戸藩邸に仕え在都十年、文化元年帰森するまでの詩稿」である。

この「升山稿」をみると、「高子濟(高崎正美)宅会足寧卿分韻同賦」・「秋夜子濟宅留別得楊字」・「和高子濟春日漫成之作」と題する詩や、「秋晚過脇子善(蘭室)分韻」といった正美や蘭室との交流を示す漢詩が、点々と収録されている。

この高橋正美は、『久留島藩士先祖書』によると高崎早枝といい、安永八年(一七七九)正月九日に御馬廻として新知百二十石で召抱えられ、天明二年(一七八二)の先祖書提出時点で三十五歳であった。また『江戸時代を中心とする珍珠の歴史物語』によると、「諱は正美、字は士濟、通称、初は早枝、後七郎左衛門・蘭台と号し、」(五九頁)とある。正美は日田の法蘭上人の紹介で通祐に仕官し、文武両道に秀でていた。遺稿としては、「角埋山明王祠記・平田山善神王廟記」などがある。天保二年(一八三一)三月二日、八十四歳で歿し、墓は安楽寺にあり「高崎士濟先生之墓」とある。

日田市東有田の帆足十左衛門氏所蔵物に、角埋城合戦で有名な帆足の息御前の掛軸がある。これらの由緒書と掛軸の讚を書いたのがこの高崎で、「蘭臺美」と記し、印には「子濟」・「高政美印」とある。

茂美の弟梅翁は大阪の篠崎小竹(一七八一―一八五一、江戸後期の儒者。名は弼、通称長左衛門)と親交があり、詩・画をよくした。彼の墓は名草台にあり(小幡家墓地内)、太字は帆足万里の書、墓碑銘の撰文と書は小竹のものである。

また『蘭室先生集略』続編卷之四には、「越智生帰省携レ桃因_テ賦_ス二送別一」と題する詩も収められている。この越智生とは、いったい誰なのであろうか。同姓を公称できるのは、近隣では森藩主一族か家老の久留島のみである。高橋英義氏は『近世日出の文化』上巻で、「久留島通尹森藩家老は蘭室の門人で、小浦塾に入塾した越智子業のようである。」という。帰省するとあるから、蘭室の塾を大帰するにあたっての送別の詩であろう。

『協蘭室全集』には、森藩の学者である「佐藤謙蔵」との交流も収録されている。謙蔵は字を謙堂といい、大阪の中井履軒(竹山の弟)の門人で詩文に巧みであった(『大分県史』近世編Ⅳ参照)。

廃藩後、内務省医務局に奉職、少書記官に任ぜられた。明治二十三年一月十六日歿。年、六十五。

○石川総弘

玖珠郡森の宮野氏に生まれ、日出の石川氏を嗣ぐ。通称は鉞蔵、栗庵と号す。

日出藩学の訓導となり、廃藩後私塾を開く。明治二十八年十一月五日歿、年六十五、(以上、『帆足万里畧伝』より)とある。

この島田仲俯について『岡山県歴史人物事典』には、

横山広保の二男に生まれる。初め日出藩の儒者・蘭学者の帆足万里に学び、帆足の友人、備前金川の難波抱節に産科・外科・内科を学んだのち、倉敷で開業した。医業の傍ら一八六一年(文久元)倉敷に来遊した森田節斎に師事、その他多くの文人志士と交遊。(中略)維新に際し倉敷県判事に任ぜられ、のち同大参事に進み、次いで秋田県少参事を経て、内務少書記官一等で衛生局次長に昇進。同門の友らと『節斎遺稿』を編集し、また著作に『玖川文集』・『島田泰夫日記』がある。

とある。

また林孚一の明治二年九月十二日の「倉敷県交替録」によると、

森藩 大参事 島田泰夫

初、島田方軒、楮後改泰夫、名泰、号養素、初帆足万里翁ノ門人、後、森田節翁ニ随、頗文章ニ長、書者東坡ヲ倣、馬ヲ好、魚鳥ノ狩、酒ヲ嗜テ不レ淫、元、医ヲ業トシテ門人数多有、金川難波立愿翁ノ門人、生質篤実勤堅、一言モ猥ニ不レ咄、威風凜然、自人恐怖ス、⑧

とある。なお明治四年(一八七二)七月十四日の廃藩置県当時の倉敷県管轄の石高は、十五郡三百八十ヶ村、高一八二、〇七四石余であった。

なお、大阪府和泉市の横山淳二氏所蔵の島田関係文書（「履歴書」）によると、泰夫は文政九年（一八二六）六月一日生れで、倉敷県出仕以前、その直前には日田郡代関係で森藩と新政府との対応にあたる久留島伊予守の家来として、「島田泰夫」が登場する。⑨しかし行程なくして倉敷へ移住したとみえて、倉敷県の判懸事に任ぜられたのは明治元年（一八六八）十一月二十七日で、同二年七月二十六日には同県少参事、翌三年三月二十八日には同大参事となっている。維新にあたっては勤王方として倉敷や京で奔走し、彼の遺した多くの日記をみると、大久保一蔵（利通）をはじめ維新や新政府で活躍した人々と、度々交流しているようだ。なお、島田泰夫夫婦の墓は、玖珠町大字帆足玄興院の横山家墓地の一隅にある。

また石川総弘は、『帆足先生文集』に未載の詩文を集録した上下二巻の『西嶋先生餘稿』を、嘉永六年（一八五二）三月刊行した。その巻頭には、藩主木下俊程の撰した序が載っている。

久多羅木氏の前記著書を見ると、万里の妻として、「玖珠郡の森から後妻を迎えた。名をタケといひ、森藩士秋山平左衛門（光褒）の長女で、萬里に入嫁してから、サキと改名した。母は同藩士原口甚五左衛門の女である。」とある。平左衛門は「大須賀隨鷗」と称し、後年大浦村に居住し、天保十三年（一八四二）十月二



～ 帆足万里の妻サキの墓 ～

碑文には「(正面)心月妙光、(右側)文簡帆足先生之配、秋山氏、嘉永六年癸丑三月十一日卒」とある。

十一月六十四歳で死去した。万里も同年であり、してみると、サキとは全く親子ほどの年の開きがあったことが分かる。

サキは万里の妻たるにふさわしく、文章も嗜み、和歌や俳句の趣味があったようで、万里に揮毫を請ふ者の中には同時に夫人の染筆も需めている。国東町の医師山下徳民が先生に紙を、夫人には短冊を贈って揮毫を依頼したとみえ、その返書に、「拙筆之儀老憊、書も出来かね申候へ共、紙先預り置申候、気分宣敷節認見可申候、家人短冊此亦如何有之可哉、先御預申候」^⑩とある。

そういう訳で万里はサキのために、大阪からわざわざ夫人用の筆を十管世話してくれるよう、門弟の関準平(蕉川)に依頼している。サキは嘉永三年(一八五〇)の冬頃から中風の気味があったが、万里の一周忌を待たずに、同六年三月十一日死去した。墓は、帆足家の菩提寺である日出の「龍泉寺」の本堂に向かって左手、帆足家の墓地内にある。

三、毛利空桑(一七九七―一八八四)

空桑は、寛政九年(一七九七)熊本藩領の大分郡常行村(大分市)に生まれた。父の太玄は三浦梅園の門人で、脇蘭室や帆足万里とも親交があった。

文化七年(一八一〇)大分郡鶴崎で私塾「菊園」を開いていた脇蘭室に漢字を学び、同十年には日出の帆足万里に入門した。空桑はその高い識見と行動力から万里門弟の中でも傑出し、「帆門十哲」とも「帆門四天王」の一人にも教えられるようになった。

また福岡の亀井昭陽(広瀬淡窓の師でもある)に師事したが、文政七年(一八二四)福岡遊学から帰郷した空桑は、生地の常行村で私塾「知来館」(大分県史跡指定)を開いた。

『江戸時代人づくり風土記・大分』^⑪の中で田本政宏氏は、八「先生門人名簿」(『毛利空桑全集』)によれば、記録に残っている空桑の門人は八百九十人ですが、散逸している可能性も考慮すると総数は千人前後と推定されます。Vという。

この「空桑先生門人名簿(調査・湯地惟精)」⑩をみると、「旧森領之部」として、御徒士御幡平之助・御医師佐藤清記・宮野源太が記されている。また元辻間村衛藤安一・恵良在医小野玄節・同長野要人(広瀬淡窓の親類)・同江良勲平(麻生勲平・麻生伊織の子)・同佐藤俊助などの名もある。

以上、蘭室・万里・空桑と師弟関係の連なる三人について若干みてきたが、どの塾もそれぞれ塾主の個性や信条に基づいて運営されている。現職高校教諭の田本氏は、前著の中で次のように結んでいる。

その強烈な独自性があるからこそ、塾生たちはその魅力にひかれ、通学事情や教育環境など現在とは比較にならない悪条件の中で、学問に励んだのです。もちろんその性格や形態はさまざまでしたが、当時の私塾のあり方で共通しているのは、「一人ひとりの個性や適性に応じてその能力を伸ばす」という姿勢に貫かれていることです。この点、とかく「画一的」

「詰め込み主義」といわれる現代の学校教育のあり方に、何らかの示唆を与えてくれるのではないでしょうか。

今まさに、個性や適性を引き伸ばす人間尊重の教育、感宜しき学園、錐と槌とに使い分ける教育が、待たれるところである。

四、恒遠頼母(一八〇三—一八六一)

享和三年(一八〇三)十月八日豊前上毛郡薬師寺村(豊前市大字薬師寺)に生まれた頼母(醒窓は、文政二年(一八一九)二月十日九日広瀬淡窓の私塾「感宜園」に、十七歳で入門した(同八年八月ごろまで、在塾)。醒窓の墓碑銘によると、「学ニ於淡窓広瀬翁一、其藻思文采與二中子玉(中島子玉)・廣旭莊(広瀬旭莊)等一、並レ鏝而馳」とあり、その俊才ぶりが窺われる。

同塾で塾長を務め、二十二歳の折感宜園を去り、長崎へと向かった。遊学を終えた醒窓は郷里で漢学塾を開いたが、このように感宜園の出身者が各々郷里に帰り、私塾・寺子屋を開いて地方文教の中心となり活躍した。そして向学の生徒を、感宜園に紹介した。頼母の塾は当初「自遠館」と言ったが、「蔵春園」とも「恒遠塾」とも称した。

頼母は文久元年(一八六一)五十九歳で亡くなるが、そのあと、子の精齋が継承し、明治十一年(一八七八)には「私立蔵春学

校」と改称し、同二十八年の精齋の死に至るまで約七〇年間続いた。

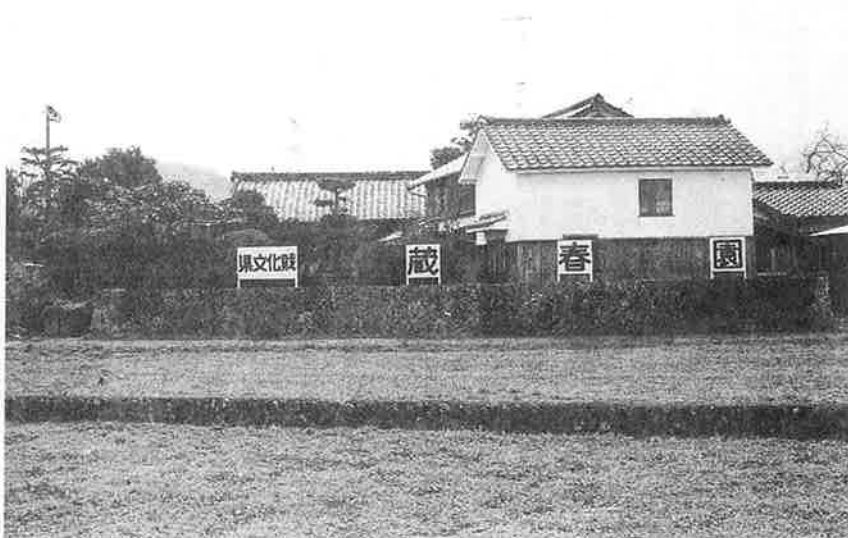
この間九州各地よりの入門者は無論、中国・四国・近畿地方から、またそれ以外の遠隔地からの多くの若者が蔵春園の門を叩いた。その数は三千人ともいわれているが、入門簿がかなり散逸しており、確かな数は分らない。

安政六年（一八五九）刊行の『遠帆樓詩鈔』の例言に、「醒窓先生弟子千有余人」とあり、凡その数を知ることができる（以上、『豊前市史』上巻・『豊前薬師寺村恒遠塾』『恒遠俊輔氏執筆参照』）。

なお、恒遠塾遊学者については既に、昭和十年福岡県が発行した『福岡縣資料』第四輯に門人の一覧が掲載されている。

これを見ていくと、塾を開いた文政七年を初め、門人簿の散逸しているものがかかなりある。ゆえに、この欠けている箇所・年数に玖珠から入門した人々もいたことは考えられる。いずれにしても、散逸をまぬがれた門人簿をみると、僧侶の入門者が多いことがわかる。

また中には、文政十一年（一八二八）四月二十日に、日田郡河内の法林寺次弟釈謙致や天保四年（一八三三）四月三日には日田



～ 蔵 春 園 ～

郡竹尾の徳勝寺法英、同八年一月二十四日には日田郡上手の諫山秀虎が、また弘化三年（一八四六）・閏五月十九日には日田竹田の照蓮寺大寂のように、近くの咸宜園に入門するのではなく、わざわざ恒遠塾まで足を運んでいる人達もいる。これから記す玖珠の人達も同じで、同郡内の石園学舎に入門するのではなく、また近くの日田へ遊学する方が便利だと思われるが（塾の運営方針は、咸宜園に倣っている）、恒遠塾へと引きつける何かがあったのであろうか。

『玖珠郡史全』（大正六年刊）によると、

石園学舎は文久年間万年村小田の人孔萊蔵氏（広瀬淡窓門下の俊才にして、淡窓の弟旭荘の大阪に私塾を開くや、従ひ赴き都講たり）、区内字妙大寺に私塾を創立し、漢字を教授したりしかば、郡内各地及他郡他國より来り学ぶ者多く、明治三・四年の頃は最も隆盛にして非常に盛況を呈したり、門人百人以上に及ぶ。

とあり、また

塾制は凡そ範を日田の咸宜園に採り、一級より九級に分ち、各級上中下の三等に分れ、月旦評によりて進級をなせり

とある。

ちなみに恒遠塾については、『近世私塾の研究』^⑬の中で著者の海原徹氏は、

蔵春園の「告諭」、「臨時告諭」などは、咸宜園の塾則に酷似しており、また等級制——〇級を客席と称し、年長者や新入生の学力不明者を編入、その上に九級上下、合計一九ランクをおき、月旦評により順次昇級せしめる、教科書——下会生（九・八級）中会生（七・六級）、上会生（五級以上）ごとに配当、修学の方法——素読、輪読、講義、会読、独見会、討論会、作文作詩などは、いずれも咸宜園の教育をほうふつとさせるものであった。醒窓はすでに在塾中、弟運平を含む一七名の紹介者となり、豊前地方からの来学者の増大に尽力したが、私塾開設後も旧師淡窓や咸宜園との緊密な交遊関係を失なわず、両塾は一種の提携関係にあった。

という。

玖珠の恒遠塾入門者

文政一一、四、二〇	豊後玖珠郡木無田	釈 崇信
嘉永三、一、二九	豊後玖珠郡瀬戸口	明教寺 釈 宝海
慶応三、九、一	豊後玖珠郡森内岩室領浄専寺新	洪 愍
慶応四、四、六	豊後玖珠郡森	専光寺 宰 相
慶応四、四、一一	玖珠	専光寺弟子 襲 常
慶応四	豊後玖珠郡森領谷屋	養専寺 了 覚
慶応四、七	豊後玖珠郡森領森	浄安寺 恵 教
明治三、一〇	豊後森藩	中嶋連平
明治一一、一〇、二〇	豊後玖珠郡菅原	辛嶋弘志
	元玖珠郡野上村長	佐藤慈光
	元大分県玖珠郡玖珠町医師	時松甚敬

(『福岡懸資料』第四輯より)

なお、福岡県京都郡北稗田村(現行橋市)の「村山仏山」の塾「水哉園」の門人帳として、天保五年(一八三四)からその歿年明治十二年(一八七九)に至るまでのものが残っている。門人は計千百二十人で、その中の安政五年の門人帳には、「玖珠郡戸畑満福寺洞達」がある(『福岡県史資料』参照)。

- 注① 「『珍珠における庶民文化の広がり』（『珍珠郡史談』第四四号所収、平成十一年 月・珍珠郡史談会刊）
- ② 『珍珠郡史談』第29号所収、「久留島家文書(9)」、福川一徳・甲斐素純、平成五年一月・珍珠郡史談会刊
- ③ 明治四十四年七月・隆文館刊
- ④ 『森藩儒 加藤茂美詩集、升山橋』昭和四十七年一〇月刊、孔版・大塚富吉著
- ⑤ 『帆足万里略伝』帆足万里先生百年祭協賛会刊、久多羅木儀一郎著
- ⑥ 詳しくは、拙稿『大分県地方史』第一二〇号所収「広瀬淡窓の府内紀行」を参照願いたい。
- ⑦ 『淡窓全集』下巻所収、「再修録」巻九。
- ⑧ 『倉敷市史』第十一巻、昭和四十九年二月刊。
- ⑨ 「久留島通靖華族家記」（『珍珠郡史談』第12号所収、甲斐素純）
- ⑩ 小野龍膽編『帆足万里書簡集』一二二頁
- ⑪ 一九九八年六月、社団法人農山漁村文化協会刊、「ユニークな私塾―西嶋精舎、知来館など」一九二頁
- ⑫ 『毛利空桑全集』昭和九年十一月・毛利空桑先生追遠会刊、
- ⑬ 昭和五十八年六月・思文閣出版刊